黒鬼の獄門番（仮）

デルタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒鬼の獄門番（仮）

【Ｎコード】
Ｎ６９２４Ｙ

【作者名】
デルタ

【あらすじ】
テンプレのＩＳのｉｆ物です。処女作ですので、適当にでも読んでいただければ光栄です。
ＰＳＰでの投稿になりますので文字数がかなり少ないですが、どうぞよろしくお願いします。
※こうした方がいい、このキャラなんか違う！等の意見もよければお願いします。

オリキャラ設定（前書き）

とりあえずオリキャラ設定
出来れば週２投稿でがんばります

オリキャラ設定

主人公
東夷（とうい）（半なかば）
性格は前向きで、基本的にはのんびりしている。

世間に名を知らしめた大企業の気に双子の弟として生まれるも、
なぜか家では代々女の方が優れていると言う伝統のようなものがあり、
半はその通りに姉の仙客（せんかく）は希代の天才、
半は普通の男子といった具合になっており、
それが原因で母親から虐待を受けた。
半が小三の時に会社の不正な行為が表に出て、
それが原因で芋蔓式に虐待が発覚、
母親は逮捕され会社は倒産
その後里親に預かられ、
その時に姉とは離ればなれになる。

現父親の会社はＩＳの研究、開発が行われており、
半はその企業代表のパイロットと言う扱いで、
専用機を持っている。
髪を肩くらいまで伸ばしている。
半に対して，男のくせに，は禁句

主人公の姉
晨桓仙客（しんかんせんかく）

半の双子の姉で、弟想いのいい姉だが、

半が虐待を受けたのは自分のせいだと思っており、
半を避けている。
専用機は無い。

長い黒髪を腰のあたりまで伸ばしており、
スタイルも整っている。
開発能力に驚くほど長けており、小一で家の会社で働き、
優秀な功績を残すほどの鬼才。
束には負ける。

オリキャラ設定（後書き）

姉は結構後になります

一話　視線（前書き）

よろしくお願いします

一話　視線

どうも、はじめまして。
東夷半です。

突然ですが、ここはＩＳ学園の一年一組です。

ある日いきなりＩＳに乗れる男性が現れたとのニュースが流れ、
そのせいで家の会社でも男性のＩＳ適正検査が執り行われた。
最後の一人として少しだけ期待して適当に検査に取り組んだところ、

乗れた

その後いろいろあってＩＳ　学園に入学した俺だが、正直人と関わりたくない、

なにせ里子であることが原因で小学校では虐められ、
中学でも友達のいなかった俺は、人との関わり方を知らない。

なので、何も期待されないことを期待していたのだが・・・

無理でした。

席は教室の一番後ろ真ん中で、
普通ならジロジロ見られたりしないはずのだが、

横から、前から、
ーーーそして気のせいだと思うが後ろからも視線が、

ダメだ、どうしよう。

また虐められたり、しない
ーーーといいな

とりあえず周りと関わりたくない、と言う俺の幻想はぶち殺されそう。

一話　視線（後書き）

第三者視点なんて文才のない主には無理です。

2話　担任（前書き）

なにとぞ御慈悲を

2話　担任

どうも、こんにちは、東夷半です

周りの人を避けることが無理だと悟った俺は、がんばって友達とやらを作ろうと軽く決心した。

とりあえず副担任の紹介が終わったようなので自己紹介タイム
それにしてもあの副担任いろいろと大丈夫だろうか？

子供のような、なんというか頼りない雰囲気だ。

・・・絶対間違えてプリント捨てたり、何も無い所でこけたりする人だよこの人。
まあそんな雰囲気のわりに胸は・・・ごほんごほん

さて、そんな事考えていたら、もう一人の男性ＩＳ操縦者の自己紹介だ。
名前は、えーと、おりなんとかさんだ。

「えー・・えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします。」
頭を下げて自己紹介、
礼儀正しい人かな？変わった名前だな、とか思って見ていると、
周りの女子から織斑くんへの視線がすごい。

何か言っておいた方がいいぞ。
「以上です。」
ーーーおいっ！

思わずずっこけた。
さすがにそこは何か言っとけよ！

スパァン！

ここでいつの間にか担任登場
痛そうだなー、あれ、
角度とか速さとか完璧だぞ。

とりあえずＳＨＲで分かったのは担任が織斑くんの姉だと言うこと
と、担任が鬼と言うことだった。

2話　担任（後書き）

ありがとうございます。

参話　お嬢（前書き）

DA☆BU☆N
こんな感じですいません。

参話　お嬢

ども、こんちは、東夷半です。

1時間目が終わり、机でくつろいで――

もとい、くつろぎたい俺の周りからの注目と視線のプレゼント。〜観察の空気を添えて〜を受けている。

誰か勇気を出してくれ、俺も話かけれないから。

このままこの休み時間は終わるのだろうか、織斑くんもいないし。

「ちょっと、よろしくて？」

おお、話かけてくれた！しかしすごい態度だな、警戒態勢に入ろう。

「よろしいけども何？」

「バカにしてますの！？」

してねぇよ、警戒はしてるがな。しかし堪えよう、キレたら負けだ。

「すいませんでした。しかしまずは名乗って頂けませんか？」

「あら、素直でよろしくってよ、このわたくしはセシリア・オルコット、イギリスの代表候補生ですわ。」

ほほぉエリートさんか、

しかしこの人絶対男子を見下してんな、今後距離をおこうか、

「代表候補生さんが俺になんの用ですか？」
「まずは挨拶をしておこうかと思いまして、それに男子ならばＩＳの知識が欠乏しているでしょうから、泣いて頼むならなら教えてあげなくも――「事足りています。」なっ！？」
やべ、キレさせた。

「あ、あなた――『キーンコーンカーンコーン』」
しかし直後に鳴ったチャイムに助けられた俺だった。

「覚えてなさい！」
警戒対象としてな。

参話　お嬢（後書き）

テスト期間があらわれた！
デルタは心と目の前が真っ暗になった！

てな訳でしばらく投稿きついです。
本当にすいません！
こんな私ですがこれからも時間があればよろしくお願いします！

4話　視線、再び（前書き）

短いです、ごめんなさい。
次から長めになると思います。

4話　視線、再び

ども　東夷です

二時間目が終わり、女子校的なノリ以外、授業に問題はない。

授業は、な。

休み時間、もといバトルロイヤル開始ーいぇーい

さぁさぁ全方位から視線の集中放火だ！

専用機があれば絶対防御でどうにかなるかなぁ

そう言えば俺は今度専用機が届くらしい、

父親一（といっても義理の…）会社で作られていらしく、性能は多分大丈夫だが、強すぎるのは駄目だ。

過度な力なんて、ロクな結果が出ない、人が傷付くだけだ。

第一強すぎる機体なんて、乗ったって楽しくない。

一応、スポーツだぜ、あれ。

そんな事考えてたら、教室の前の方でおりむ…ら（でよかったっけ）くんとセシリア嬢が喋ってる。

というか周りの女子がそっちを見ていて俺に視線がこない。

のんびり寝れそ『キーンコーンカーンコーン』

あ〜あ。

寮に帰ったら存分に寝てやる！

5話　怒り

ちわーっす　半です
会議なう
というのもクラス代表を決めるとかなんとか

女子の手が上がる
「私は織斑君がいいと思います！」
「私は東夷君で！」
「やっぱ織斑くんでしょ！」
「東夷くんの方がいい！」
てな訳で俺と織斑くんが同率一位でおわ「納得いきませんわ！」
――らなかったか。
まぁ俺もクラス代表なんて嫌だし
「男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！」
――男が恥？
「わたくしにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」
屈辱？

他にも日本の事とか言ってたがどうでもいい。
「イギリスだって大してお国自慢ないだろ、不味い料理何年覇者だよ」
――んな事ぁどーでもいいんだよ、だがなぁ！
「男を馬鹿にすんじゃぁ無ぇ！」
机を思いっきり叩いて立ちあがる

「男が恥だぁ！？
その程度で屈辱だぁ！？
そんな考えのヤツのせいで俺が、世界の男が、どんな目に会って、
どんな心情になってるか、考えたことあんのかよ！
その程度の事も考えられ無ぇなら軽口きいてんじゃねぇ！
ブチ殺ー『言いすぎだ、もうやめろ』何だよ男子
「お前にも何か有るんだろうけど、言い過ぎだ。
一回落ち着け。」
ああ、またやっちまった。
「・・・その通りだな、ごめん、言い過ぎた。」
そう謝って席に座「決闘ですわ！」りたかったのに・・
まあおれがボロクソ言ったのが悪いんだしおれはいいけど
「貴方もですわ！」
「俺も！？」
指を指された織斑くんが怯む
まあそっちもいろいろ言ってたしな。
しかし問題は――
「先生、そんなことしてもいいんですか？」
「いいだろう、では勝負は来週の月曜だ。
しかしＩＳの操作時間やアリーナの使用可能時間を考慮し、織斑と
東夷の勝った方がオルコットと勝負しろ。
それでいいな？」
「「はい」」
「それでは授業を始める。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6924y/

黒鬼の獄門番（仮）

2011年12月5日00時46分発行